

リトアニア語動詞の活用

柳 沢 民 雄

§0. はじめに

本稿の目的は、共通リトアニア語動詞の活用の形態的な記述と分析である。ここでの形態的分析は、純粹に共時的な分析ではなくて、通時的観点を導入した。対象は接頭辞を有しない単純動詞¹⁾の基本形、すなわち現在形と単純過去形 (*būtasīs kartinis laikas*)²⁾ および不定形の形態にのみ限られる。一般にリトアニア語文法において用いられている動詞活用の3種類の区別 (I活用, II活用, III活用) は、実際には現在形の語尾³⁾のみによる分類であり、不定形と単純過去時制の形についての分類ではない。リトアニア語のその他の時制や分詞、および法を形成するさいには三つの基本形の語幹を知る必要がある。すなわち現在語幹からは現在能動分詞と現在受動分詞が、過去語幹からは過去能動分詞が、また不定形語幹からは過去多回体時制 (*būtasīs dažninis laikas*)、未来時制、スピヌム (*siekinys*)、仮定法、命令形、半形動詞 (*pusdalyvis*)、過去受動分詞、必要分詞 (*reikiamybės dalyvis*) および第二不定詞 (*būdinys*) が規則的に形成される。したがって、他の動詞派生形を形成するためにも、基本形の形態を知る必要がある。

§1. 動詞語幹の構造

リトアニア語の接頭辞をもたない動詞の基本的な構造は、「語根+(接尾辞)+(thematic 母音)+(語尾)」と分析することができる。() 内の各形態素はあることもないことも可能であるが、しかし語根のみの語はリトアニア語には存在しない。ここでの thematic 母音とは、本来の thematic 母音の -a- (< IE *-o-) と半 thematic 母音 (*pusiau tematiniai balsiai*) の -i-, -o-, -e- を含む。リトアニア語において、共時的観点から thematic 母音は、ある場合には語尾とみなされるのであるが、本稿では通時的観点を優先し、thematic 母音と語尾とを区別する。例えば、現在時制の3人称 *bėga* 《(彼は) 走って行く》における語末の -a は thematic 母音であり、語尾はゼロである。

語根は基本的には CVC の構造をもつが、CVCC, CCVC, CVVC, CCCVC, CCVVCC, VCC, VVCC 等も可能である。また語根には、infix -n- と formant -st- が現在形にのみ挿入あるいは付加されることもある: *stig-ti* 《不足する》, *sti-ñ-g-a*, *stig-o*; *al̄p-ti* 《気絶する》, *al̄p-st-a*, *al̄p-o*。さらに語根は、不定形と現在形および単純過去形 (以下これらの形を「3基本形」と称し、例では不定形、現在形と過去形の3人称形の順序で示すことにする) において母音交替をみせる

ことがある。その場合、次のような本来的な区別が見られる：1) 不定形と過去形の語根は弱階梯 iR ($R = \text{ソナント}$) を、現在形の語根は強階梯 (正常階梯 $*eR$) を示す： $pirkti$ 《切る》, $peřka$, $piřko$, 2) 現在形の語根母音は短く、過去形の語根は延長階梯を示す。このさい不定形語根がソナント l , r , m , n で終わっているときには不定形語根は、現在形語根と同じであり、他の場合は過去形語根と等しい： $gēliti$ 《痛む》, $gēlia$, $gēlē$; $lēkti$ 《飛ぶ》, $lēkia$, $lēkē$ 。また本来的でない語根の母音交替、例えば、現在形において非閉鎖子音の前の infix $-n-$ の消失のために、母音の延長を示す場合がある： $šálti$ 《凍える》, $šála$ ($< *šařla$), $šalo$ 。この種の語幹には、さらに formant $-st-$ が付加される場合がある： $dūs-ti$ 《喘ぐ》, $dū-st-a$ ($< *du-ñ-s-st-a$), $dūs-o$ 。

さらに語幹は、ある場合に接尾辞 $-in-$, $-en-$, $-(i) o-$, $-ē-$, $-y-$, $-(i) uo-$, $-(i) au$, $-tel-$, $-ter-$, $-tele-$ 等によって拡大される。リトアニア語の動詞は、この接尾辞のあるなしによって基本的に2つのクラスに分けることができる。1) 接尾辞をもたない場合、現在形語幹における infix や formant, および語幹の母音交替を考慮に入れないならば、3基本形の語幹は全て動詞語根に一致する： $bēg-ti$ 《走る》, $bēg-a$, $bēg-o$ 。このような語幹をもつ動詞を「一次動詞」とよぶことにする。これに対して、2) 接尾辞をもつ場合には、3基本形のうち不定形語幹は必ず接尾辞をもち、さらに以下のように下位区分できる：a) 3基本形の全ての語幹が接尾辞をもつ場合と、b) 3基本形のある形だけが接尾辞をもつ場合である。このa) の語幹をもつ動詞を「接尾辞動詞」、b) の語幹をもつ動詞を「混合動詞」とよぶことにする。接尾辞動詞には、さらに3基本形全てに同じ接尾辞をもつもの： $gyv-én-ti$ 《住む》, $gyv-ēn-a$ $gyv-ēn-o$ と過去形語幹のみが異なる接尾辞をもつもの： $dain-úo-ti$ 《歌う》, $dain-úo-j-a$, $dain-āv-o$ とがある。混合動詞は、現在形語幹だけが接尾辞をもたないもの： $tur-é-ti$ 《持つ》, $tūr-i$, $tur-ėj-o$ と現在形と過去形語幹が接尾辞をもたないもの： $sak-ý-ti$ 《言う》, $sāk-o$, $sāk-ė$ に区別できる。

thematic 母音は、athematic 動詞には当然存在しないが、現在リトアニア語においては、動詞の athematic 形は3人称の現在形にのみ若干残っているにすぎない：例えば、 $ēsti$ 《よくある》, $nēsti$ 《よく…ない》, $niēžti$ 《むず痒い》, $peřšti$ 《痛がゆい》, $kósti$ 《咳をする》¹⁾。これに対して、本来的な athematic 動詞、例えば $būti$ 《ある》, $eiti$ 《行く》, $dúoti$ 《与える》, $dėti$ 《置く》等は、今日では $o-$ 語幹 (ある場合には infix $-n-$ を含む) によって置き換えられた： $ėsame$ (l. pl.) $< esmė$, $dúodame$ (l. pl.) $< dúome$, $dėdame$ (l. pl.) $< demė < *dedmė$, $eĩname$ (l. pl.) $< eimė$ 。それゆえ本稿では thematic 動詞だけを扱うことにする。thematic 母音は、現在形では a , i , o を、過去形では o , $ė$ をもつことができ、不定形では thematic 母音は存在しない。現在形と過去形の thematic 母音は、次のように対応する： $a : o$, $a : ė$, $i : o$, $o : ė$, $o : o$ 。さらに、共時的に言えば、thematic 動詞の活用において、子音で始まる語尾の前 (すなわち, Sg. 1., 2. 以外の人称) では thematic 母音は変化しないが、母音で始まる語尾 (すなわち, Sg. 1., 2.) の前で次のように交替する：1) 長い半 thematic 母音 o , $ė$ は、それぞれ短母音 a , e に交替す

る : bėg- ϕ -ti 《走って行く》 : bėg-o- ϕ (3 人称・過去), bėg-o-me (1. Pl.), bėg-a-u (1. Sg.), bėg-a-i (2. Sg.); nėš- ϕ -ti 《運ぶ》 : nėš-ė- ϕ (3 人称・過去), nėš-ė-me (1. Pl.), nėš-e-ū, (1. Sg. 正書法では, nešiaū と書かれる⁵⁾), nėš-e-ī (2. Sg.). 2) 短い thematic 母音 a は脱落し, i は後舌母音の前で先行する子音を軟化して消える : bėg- ϕ -ti 《走って行く》 : bėg-a- ϕ (3 人称・現在), bėg-a-me (1. Pl.), bėg- ϕ -u (1. Sg.), bėg- ϕ -i (2. Sg.); myliėti 《愛する》 : myl-i- ϕ (3 人称・現在), myl-i-me (1. Pl.), myl'- ϕ -u (1. Sg. 正書法では myliu と書かれる), myl'- ϕ -i (2. Sg.).

§ 2. 人称語尾

リトアニア語の thematic 動詞は, 他の印欧諸言語とは異なり, 全ての数において 3 人称語尾を持たず, また全ての時制で人称語尾を共通する。すなわち, 3 人称形は, thematic 母音をもつ語幹のみからなる形を持ち, 単数と複数, および双数は同じ形を持つ。他の thematic 動詞の人称語尾は, 現代共通リトアニア語においては以下のとおりである :

	sg.	pl.	dual
1.	-u	-me	-va
2.	-i	-te	-ta
3.		∅	

アクセントに関しては, thematic 動詞の人称変化において, 語幹が circumflex (-) あるいは grave (˘) の音調を持つとき, リトアニア語は単数の 1, 2 人称形において, アクセントを推移させる。つまり, 所謂ソシュールの法則がこの形だけに働いたため語尾アクセントになる : nėša 《(彼は)運ぶ》, nėšū (1. Sg.), nėši (2. Sg.); riša 《(彼は)結ぶ》, rišū (1. Sg.), riši (2. Sg.)。ソシュールの法則によれば, 本来的にアクセント的であった非 acute 音節から, それに直接後続する acute 音節にアクセントが推移する : *r' aĩkã > *raĩk'ã > rankà 《腕》 (Nom. Sg.) : *r' aĩkõs > raĩkos (Gen. Sg.)。すなわち, リトアニア語の動詞のアクセントは, ソシュールの法則が働かない場合と働いた場合の二種類に区別され, それは各々の語幹の音調が acute 及び非 acute の場合である :

	bėgti 《走って行く》			nėšti 《運ぶ》		
	sg.	pl.	dual	sg.	pl.	dual
1.	bėgu	bėgame	bėgava	nėšū	nėšame	nėšava
2.	bėgi	bėgate	bėgata	nėši	nėšate	nėšata
3.		bėga			nėša	

§ 3. 形態音韻的交替

現在リトニア語の動詞において、以下の形態音韻的交替がみられる：

- 1) 後舌母音 (a, u) の前の軟子音 d', t' は, dz', ž' と交替する：

sėdi 《(彼は)座っている》：sėdžiu 《(私は)座っている》；
 veřtė 《(彼は)変えた》：veřčia 《(彼は)変える》。
- 2) t の前の子音 d, t は, s と交替する：

sėda 《(彼は)座る》：sėdo 《(彼は)座った》：sėsti (< sėd-ti, inf.)；
 řita 《(彼は)転がす》：řito 《(彼は)転がした》：řisti (< řit-ti, inf.)。
- 3) 摩擦音 s, š, z, ž の後ろの d, t は, 不定形の語尾 -ti の前で脱落する：

brũzdo 《(彼は)不安になった》：brũzti (< brũzd-ti, inf.)；
 beřgždė 《(彼女は)子を産まなくなった》：beřgžti (< beřgžd-ti, inf.)；
 druņstė 《濁した》：druņsti (< druņst-ti, inf.)；
 knėkštė 《(彼は)すすり泣いた》：knėkšti (< knėkšt-ti, inf.)。
- 4) 子音 d, t は, 現在時制形に現れる formant -st- の前で脱落する：

geřto 《黄色くなった》：geřsta (< geřt-st-a)；
 klýdo 《(彼は)誤解した》：klýsta (< klýd-st-a)。
- 5) 現在時制における formant -st- は, 子音 s, š, z, ž の後ろの位置で formant のはじめの s を失う(すなわち, 音声的に同化した)：s, z + s > s；š, ž + s > š)：

ĩřso 《(彼は)疲れた》：ĩřsta (< ĩřs-st-a)；
 aũšo 《夜が明けた》：aũšta (< aũš-st-a)；
 ĩřzo 《(彼は)いらいらした》：ĩřzta (< ĩřz-st-a)；
 ľũžo 《砕けた》：ľũžta (< ľũž-st-a)。
- 6) 子音の前で sk šk, zg, žg は, ks, kš, gz, gž に音韻転換を起こす：

drisko 《裂けた》：driksiti (inf.)；
 reřškė 《(彼は)もぎ取った》：reřkšti (inf.)；
 mėzgdė 《(彼は)縛った》：mėgziti (inf.)；
 džeřžgdė 《(彼は)がちゃんと音がした》：džeřgžti (inf.)。
- 7) 母音 u の後ろの子音 j は, 子音の前で i と交替する：

gũja 《(彼は)追う》：gũiti (inf.)。
- 8) 母音 i の後ろの子音 j は, 子音の前で i と交替し, 前の母音 i と融合して長音の y となる：

dalija 《(彼は)分ける》：dalýti (< dali-i-ti, inf.)。
- 9) i, u 以外の母音の後ろの子音 j は, 子音の前で脱落する：

sėja 《(彼は)種をまく》：sėti (inf.)；jója 《(彼は)馬で行く》：jóti (inf.)。

- 10) 母音の後ろの子音 *v* は、子音の前で *u* に交替する。もし *v* の前の母音が *u* のとき、前の *u* と融合して *ū* になる：

gāvo 《(彼は)受け取った》： *gāuna* 《(彼は)受け取る》： *gāuti* (inf.)；

siūva 《縫う》： *siūvo* 《縫った》： *siūti* (< *siū-u-ti*, inf.).

- 11) 現在語幹と不定形語幹において、非閉鎖子音 *l*, *r*, *s*, *š*, *z*, *ž*, *v* および *m* の前の子音 *n* は、先行する母音を延長化して消える。その際、一般に正書法では *ą* (< *a + n*), *ę* (< *e + n*), *ū* (< *u + n*), *y* (< *i + n*) を用いる：

šalo 《凍えた》： *šąla* (< *šaŋla*) 《凍える》；

keñtė 《耐えた》： *kęsti* (< *keñsti*, inf.)；

gūro 《刻まれた》： *gūra* (< *guñra*) 《刻まれる》；

būro 《降り注いだ》： *būra* (< *biñra*) 《降り注ぐ》.

§ 4. 動詞の活用型

リトアニア語の動詞は、一般に現在語幹の構造によって3つのタイプの活用型が区別される。I型動詞に属するのは、thematic 母音 *-i* *a* によって終わる動詞である：*dūrba* 《(彼は)働く》, *ruošia* 《(彼は)用意する》。II型動詞に属するのは、母音 *-i* によって終わる動詞である：*mýli* 《(彼は)愛する》。III型動詞に属するのは、母音 *-o* によって終わる動詞である：*sāko* 《(彼は)言う》)。さらに単純過去形の語幹は、*-o* あるいは *-ė* によって終わる。現在語幹と過去語幹との組み合わせによって、以下のように動詞は下位区分される：

	thematic stem				半 thematic stem	
	I				II	III
	1	2	3	4		1 2
現在	a	a	ia	ia	i	o o
過去	o	ė	ė	o	o	ė o

I型動詞は、現在語幹が *-(i)a* で終わり、過去語幹が *-o* あるいは *-ė* で終わる。現在形における thematic 母音は、硬子音の後ろでも軟子音の後ろでも出会う。I型動詞は3つの語幹タイプ、一次動詞（以下、このタイプの動詞をAにより表示する）、混合動詞（Bにより表示する）および接尾辞動詞（Cにより表示する）の全てが可能である。I-1型はA, B, Cの3タイプが可能であり、同様にI-2型はAタイプ、I-3型にはAタイプ、I-4型にはBタイプが可能である。II型動詞に属する動詞は、現在語幹が *-i* で終わり、過去語幹は接尾辞 *-ėj-* を持ち、*-o* で終わる混合動詞である。III型動詞に属する動詞は、現在語幹は *-o* で終わり、1) 過

去語幹に接尾辞をもたずに *-è* で終わり、不定形語幹に接尾辞 *-y-* をもつ B タイプと、2) 過去語幹に接尾辞 *-oj-* を持って *-o* で終わる B タイプがある。さらにこれらの動詞活用型は、一次動詞においては語根の構造により、混合動詞と接尾辞動詞においては接尾辞の種類により、さらに下位分類することができる。この際、語根の構造は、1) 3 基本形全てに共通な語根母音の種類(短母音、長母音、二重母音あるいは、母音+ソナント)による各タイプ、2) 基本形において語根母音の量的交替、および質的交替をみせる各タイプ、3) 現在時制形にのみ infix *-n-* を挿入するタイプ、4) 現在時制形にのみ formant *-st-* を付加するタイプに分類することができる。これらの語根による分類は、各動詞の活用型と密接に関係している。具体的にこれらの動詞を考察してみよう。

§ 5. 動詞の活用

以下の動詞の分類は、上の分類方法によって、例えば、I-1-A-a のように図式する。この場合、I は I 活用型を、1 は現在語幹と過去語幹がそれぞれ *-a*, *-o* で終わる動詞語幹のタイプを、A は一次動詞を、a はこのタイプの動詞の語根あるいは接尾辞の下位分類をあらわしている。

§ 5.1. I-1-A-a : (infix *-n-* 型) : *stigi* 《不足する》, *stiŋga*, *stigo*.

現在時制形にのみ infix *-n-* を挿入するタイプであり、語根母音は短母音、多くは *i*, *u* であり、若干の語根は *e*, *a* を持ち、音調は *grave* を特徴とする。語根末子音は *p*, *b*, *t*, *d*, *k*, *g* の閉鎖音が可能である。すなわち、語根構造は、CVT, CCVT (C=任意の子音; V=*i*, *ù*, *è*, *à*; T=閉鎖音) である。infix の *-n-* は、*b*, *p* の前で *-m-* に変わる。また現在時制形は、常に *circumflex* を持つのに対して、不定形は他の音調を持つ。このタイプの動詞は、リトアニア語において非常に生産的であり、特に特徴的であることはほとんど自動詞である。以下の例は、不定形の語根の形のみを記す。なお、不定形語尾 *-ti* の前で *t*, *d* > *s* の子音交替を示すものは、交替以前の基底形⁶⁾を記す。例えば、*ràsti* 《見付ける》 (< *ràd-ti*), *rañda*, *rādo* の場合は、*rād* と記すことにする。

例⁷⁾ : *glèb-*, *klèb-*, *žlèb-*, *stèb-*, *kìb-*, *klìb-*, *žlìb-*, *drìb-*, *dùb-*, *gùb-*, *knìub-*, *šlùb-*, *grùb-*, *smèg-*, *mìg-*, *smìg-*, *snìg-*, *pìg-*, *strìg-*, *stìg-*, *gùg-*, *žlùg-*, *žlùg-*, *àk-*, *kàk-*, *tràk-*, *krèk-*, *tèk-*, *plìk-*, *rìk-*, *drìk-*, *krìk-*, *trìk-*, *tìk-*, *štìk-*, *bùk-*, *kùk-*, *blùk-*, *plùk-*, *mùk-*, *smùk-*, *rùk-*, *sprùk-*, *trùk-*, *tùk-*, *šláp-*, *táp-*, *šèp-*, *vìp-*, *kvìp-*, *čiùp-*, *plìup-*, *šiùp-*, *klùp-*, *knùp-*, *rùp-*, *trùp-*, *ràd-*, *pràt-*, *gèd-*, *skrèd-*, *kìd-*, *kìt-*, *glìt-*, *sklìd-*, *plìt-*, *mìt-*, *spìt-*, *krìt-*, *svìd-*, *švìt-*, *guřd-*, *bùd-*, *gùd-*, *siùt-*, *jùt-*, *kùt-*, *glùd-*, *pùt-*, *rùd-*, *grùd-*, *skrùd-*, *šùt-*.

§5.2. I-1-A-a': (現在形が長音): gūrti 《刻まれる》, gūra, gūro.

このタイプは、基本的に上記のタイプと同じである。ただ異なるのは、語根末音が非閉鎖子音 l, r, s, š, z, ž, v および j であり、その前で infix -n- が先行する短母音を延長化していることである⁹⁾ (3章の11) 参照)。語根は、「母音+ソナント(R)」のとき iR, uR, aR, eR であり、他の場合は短母音の i, u を持つ。またこの語根構造は, CVR, CVS (R=ソナント l, r; u, i; S= s, š, z, ž) および CVCC (最後の子音群は, sk, šk, zg, zd) である。例として示した語根は、子音の前で交替 (-sk- > -ks-, -šk- > -kš-) をおこす場合、また子音 v, j が子音の前で u, i に交替して、先行の母音 u, i と融合を起している場合は、基底形(すなわち、過去形で現れる語根)を示した: 例えば, pūti 《腐る》(<*pū-u-ti), pūva (<*pu-ñ-v-a), pūvo; lýti 《雨が降る》(<*li-i-ti), lýja (<*li-ñ-i-a), lijo.

例: bál-, sál-, šál-, žál-, dīl-, kīl-, skīl-, tīl-, svīl-, tvīl-, žīl-, dūl-; kér-, glér-, klér-, dvér-, gvér-, ĩr-, klīr-, nīr-, stīr-, svīr-, žīr-, gūr-, biūr-, čiūr-, kiūr-, šliūr-, niūr-, šiūr-, šniūr-, skūr-, pūr-, spūr-; drīsk-, tišk-, plīušsk-, pūšk-; kiūž; bliūv-, kliūv-, griūv-, pūv-, srūv-, žūv-; mīzg-, nīzg-, rīzg-, brīzg-, grūzd; gīj-, lij-, šlij-, plj-, rīj-, sij-.

上で述べたこれらの2つの infix -n- を持つ(あるいは、持っていた)動詞タイプに特徴的なことは、1) 語根母音は常に短く、2) 過去時制形は o- 語幹(<*ā-) をもち、3) 現在時制形では必ず circumflex 音調をもち、4) 意味的には、自動詞性を特徴とする。他の印欧語において infix -n- は閉鎖音の前でのみ可能であったのに対して、リトアニア語(バルト諸語も)はソナントおよび摩擦音の前においてもそれを可能にした。

§5.3. I-1-A-b: (formant-st 型): aīpti 《気絶する》, aīpsta, aīpo.

このタイプは、現在形の語根に formant-st- を付加する動詞であり、現在形語幹は -a, 過去語幹は -o に終わる。例外は, gimti⁹⁾ 《生まれる》, gimsta, gūmė; mīrti 《死ぬ》, mīršta, mīrė である。動詞語根において最もしばしば見られるのは, (C)CVC, CVRC (R=ソナント r, l, m, n; i, u) の構造である。語根の構造が (C)CVC のとき語根母音は長く(ū, y, o, é), 他方, CVRC のとき、1) 過去形においても同音節的な二重母音的結合(iR, uR, aR, eR, au, uo, ui, ai, ie, ei): leīpti 《茫然となる》, leīpsta, leīpo と2) 過去形において異音節的な二重母音的結合(im, in, um, un; em, en, am, an): témti 《(日)が暮れる》, témta, tēmo をもつ。語根末子音は、閉鎖音 b, p, t, d, k, g および s, š, z, ž, m, l, v および子音結合 šk, zd で終わることができ、formant-st- と同化して以下の変化をする(3章4), 5)) : d, t, s, z, + st > st; š, ž + st > št. 以下、上述したように不定形の語根の基底形を示す。例えば, blįsti (<blīnd-ti) 《暗くなる》, blįsta (<*blīnd-st-a), blīndo の場合, blīnd- と記す。

例: geīb-, staīb-, giīb-, stiīb-, bañb-, keñb-, reñb-, skób-, lōb-, žvařb-, skiřb-, guřb-;

még-, drég-, svaig-, dýg-, lýg-, stýg-, stałg-, ilg-, spiłg-, viug-, spañg-, brang-, ing-,
biñg-, diñg-, sprīng-, tīng-, stīng-, druñg-, blög-, spróg-, mařg-, vařg-, dirg-, sprīrg-,
búg-, slúg-, rúg-; plék-, drék-, klaik-, paik-, dýk-, sveik-, nýk-, pýk-, dryk-, týk-, kluuk-,
puik-, výk-, álk-, smílk-, tīlk-, tvīlk-, dülk-, smůlk-, blañk-, meñk-, liñk-, brīnk-, švīnk-,
tviñk-, jūnk-, nók-, stók-, miřk-, tvīrk-, buřk-, dūk-, niūk-, rūk-, trúk-; sál-, méł-, šél-,
gil-, tól-; krám-, tém-, kīm-, lim-, rīm-, trīm-; tvīn-; vép-, keip-, leip-, klýp-, krýp-,
šip-, stip-, ałp-, silp-, tiłp-, žiłp-, pañp-, kliñp-, kuñp-, slóp-, sōp-, tařp-, siřp-, tiřp-,
šiuřp-, puřp-, dér-, plér-; blés-, brénd-, breñt-, vés-, skýd-, lýs-, klýd-, sklýd-, slýd-,
drįs- (< driñ-), tįs- (< tiñs-), výt-, bałt-, smałs-, sałd-, gełt-, iłs-, dułs-, žuł-, žód-, kařt-,
skīřd-, smīřd-, niř-, šiřd-, vīřt-, kuřt-, skuřt-, puřt-, saūs-, liūd-, plūd-, nūd-, snūd-,
drūt-, sprūd-; gaiš-, ráiš-, kvaiš-, plýš-, bréšk-, blýšk-, rýšk-, trýšk-, tróšk-, vīrkš-,
bliúšk-, małš-, krióš-, luóš-, kárš-, kiřš-, miřš-, niřš-, áuš-, auš-, kauš-, (džiú-), grīnzd-,
tiłž-, tułž-, diřž-, lūž-, túž-; sén-, tvīn-.

formant -st- は、自動詞的、および起動的 (inchoative) 意味機能を果していた。これは infix -n-
をもつ動詞と同じ自動詞的意味機能をもっており、1-1-A-a' タイプにおいては、infix の n が
非閉鎖音の前で消失した後に、formant -st- をもつ形が拡大したと考えられる。さらに、infix
-n- (摩擦音の前では、すでに infix -n- が先行する母音を延長化して消えている) と formant -st-
の両方の要素を備えた動詞がある: gēsti 《消える》, gēsta (< *gēns-sta), gēso. これらの動詞
タイプは、語根母音が短母音 i, u, e, a であり、語根末が子音 s, š, ž で終わっている。

例: gēs-, vis-, dvis-, dūs-, prūs-, sūs-, šaš-, trēš-, kliš-, miš-, triuš-, glūš-, plūš-,
kēž-, glēž-, knēž-, tēž-, iž-, giž-, šiž-, tiž-, dūž-, kiūž-, gniūž-.

すなわち、これらの動詞タイプは、infix -n- の要素が消滅した後、現在形における長母音だ
けでは自動詞的意味をあらわすことができず (他動詞性を意味し、語根に長母音をもつ動詞の
例: glēbti 《包む》, glēbia, glēbē, さらに 1-3-a を参照), 自動詞性を強調するために、さら
に formant -st- を付加したものと考えられる。さらに、infix -n- あるいは formant -st- をもつ弱
階梯を特徴とする動詞と標準階梯の母音をもつ動詞が、自動詞性と他動詞性の点で対立する例
がある¹⁰⁾。1) ý: íe あるいは éi: dýgti 《発芽する》, -sta, -o: dięgti 《(芽を) 植え付ける》,
-ia, -ė: lýti 《雨が降る》, lýja, lįo: liėti 《注ぐ》, -ja, -jo; 2) ú: áu: džiúti 《乾く》, džiūva,
džiūvo: džiáuti 《乾燥させる》; griúti 《倒れる》, griūva, griūvo: griáuti 《倒す》; 3) iR: éR:
kilti 《上がる》, kyla, kilo: kėlti 《上げる》, kėlia, kėlė; skilti 《分裂する》, skyla, skilo: skėlti
《割る》, skėlia, skėlė; 4) i あるいは ý: iė, eī: mišti 《混ざる》, mýšta, mišo: miėšti 《薄
める; だろだろにする》, miėšia, miėšė; krýpti 《曲がる》, krýpsta, krýpo: kreipti 《曲げる》,
-ia, -ė; 5) u: aū: jūkti 《混ざる》, juñka, jūko: jaukti 《混ぜる》, -ia, -ė; 6) iR: eR:

stīl̄bti 《躰になる》, stīl̄bsta, stīl̄bo : stel̄bti 《躰にする》, -ia, -è ; mir̄kti 《濡れる》, mir̄ksta, mir̄ko : mer̄kti 《濡らす》, -ia, -è ; līnkti 《傾く》, līnкта, līnko : lēnkti 《傾ける》, -ia, -è ; etc.

§ 5.4. I-1-A-c : (語根母音 i, u) : l̄ūpti 《剥く》, l̄upa, l̄upo.

このタイプは、3基本形すべてに同じ語根をもち、語根は多くの場合、短母音 i, u をもつ。しかし若干の動詞は、長母音 ó, ú, é, ý をもつ。語根は、CVC を基本とし、語根末子音は k, g, t, d, p, s, š, j, v である。語根末子音が j と v のとき、不定形の語尾 -ti の前でそれぞれ i, u になる : gùiti 《追う》, gùja, gùjo ; siùti (<*siu-u-ti) 《縫う》, siùva, siùvo。このタイプの動詞は非生産的である。

例 : br̄uk-, sùk-, lip-, lùp-, sùp-, knis-, r̄it-, skùt-, kiš-, riš-, kr̄uš-, siùv-, ùj-, dùj-, gùj-, zùj- ; dir̄b-, bég-, mýg-, áug-, sók-, kánd-, séd-, žind-, gr̄úd-.

§ 5.5. I-1-A-d : (iR : eR : iR) : kīr̄pti 《切る》, kēr̄pa, kīr̄po.

このタイプの動詞は、語根における母音交替を特徴とし、不定形と過去形で弱階梯を、現在形で正常階梯をとる。語根は、iR : eR の circumflex を有する二重母音的結合をもち、語根構造は CVRC が基本である。このタイプの動詞はほとんどが他動詞であり、例外を成しているのは、語根母音に i : iē の交替をもつ lik̄ti 《残る》, liēka, liko である。このタイプは非生産的である。例は不定形の弱階梯語根だけを示す。

例 : vīlk-, slīnk-, rīnk-, tr̄ink-, pīrk-, tīlp-, kīrp- ; sīrg- ; līnd- (inf. l̄jsti) ; krīr̄nt-, kīr̄t- ; kīm̄š-, pīr̄š- ; vij- (vėja) ; lik (liēk-).

このタイプは、次第に消滅の過程にあり、以前にはより多くの動詞がこのタイプに属していたと思われる。過去形で弱階梯をもつリトアニア語方言の例を参照されたい : svīlti 《焦げる》, svēla, svilo, etc.

§ 5.6. I-1-A-e : (不規則タイプ) :

dėti 《置く》, dėda, dėjo ; eiti 《歩いて行く》, eina, ějo ; gauti 《受け取る》, gáuna, gávo ; būti 《〜である》, yrà, bùvo.

dėti は、現在形において接尾辞 -d- をもつ。この接尾辞 -d- は、他のタイプの動詞 (現在形 : -a, 過去形 : -è) にも若干みられる : vir̄ti 《沸騰する》 vérd̄a, vir̄è ; dúoti 《与える》, dúoda, dāvè. 一方, gauti, eiti タイプの動詞は、接尾辞 -n- をもつ。さらにこのタイプには、būna 《いつも〜である》も加えることができる。他のタイプの動詞 (-a, -è) にもまた、接尾辞 -n- はみられる : aūti 《靴を履かせる》, aūna, āvè ; ráuti 《引き抜く》, ráuna, róvè, etc. 一方 būti の現在形は、3人称で yrà, それ以外では ěs- を語根とする。yrà は、パラダイムの中で孤立した形であり、起源は不明である¹¹⁾。これらの多くの動詞は、本来 athematic 動詞であり、

接尾辞を伴って thematic 動詞に移行した。例えば, ēiti は, 自動詞的な意味特徴を有する infix -n- の影響により, 接尾辞 -n- を受け取ったと考えられる (さらに athematic 動詞の 3 人称現在形 sniēgti 《雪が降る》と infix -n- を有する今日の形 sniŋga を比較されたい)。

§ 5.7. I-1-B-a : (-ēti : -a : ējo) : kalbēti 《話す》, kal̄ba, kalbējo.

このタイプの動詞は, 混合タイプの動詞であり, 不定形と過去形において接尾辞 -ēj- をもつ。この接尾辞は, 常に acute 音調をもち, 語根末子音は硬音をもつ。このタイプの動詞は非常に数が多いので, その一部のみを示す。例は, 不定形と現在形を示す。

例 : mokēti (mōka), sopēti (sōpa), mirgēti (mīrga), barškēti (bārška), drebēti (drēba), lašēti (lāša), judēti (jūda), žibēti (žiba), etc.

§ 5.8. I-1-B-b : (-ōti : -a : -ōjo) : giedōti 《歌う》, gīeda, giedōjo.

このタイプの動詞は, 混合タイプの動詞であり, 不定形と過去形において接尾辞 -ōj- (< *ā-) をもつ。このタイプの動詞は, 上の例を入れて全部で 3 語しかない。例は, 不定形と現在形を示す。

例 : miegōti 《眠る》 (miēga), raudōti 《号泣する》 (ráuda).

§ 5.9. I-1-C-a : (-auti : -auja : -avo) : draugāuti 《親交がある》, draugājuja, draugāvo.

このタイプの動詞は, 接尾辞タイプの動詞であり, 3 基本形の全てに接尾辞 -au(j)- を付加する。このタイプの動詞は, リトアニア語において非常に生産的であり, 名詞由来語 (denominative) でも動詞由来語 (deverbative) でもある。動詞から由来した語は, 強意的意味を帯びる。例 : 名詞由来語 : kēlias 《道》 → keliāuti 《旅行する》, studeñtas 《学生》 → studentāuti 《学生である》, úoga 《イチゴ類》 → uogāuti 《イチゴ類を集める》 ; 動詞由来語 : rékti 《叫ぶ》 → rékauti 《大声で叫ぶ》, žviēgti 《金切り声をだす》 → žvīygauti 《激しく金切り声をだす》。

その他の例 : dūsauti, džiūgauti, klýkauti, rékauti, mérgauti, výrauti, smárkauti, bernāuti, kunigāuti, badāuti, senāuti, etc.

§ 5.10. I-1-C-b : (-uoti : -uoja : -avo) : dainuōti 《歌う》, dainuōja, daināvo.

このタイプの動詞は, 接尾辞タイプの動詞であり, 3 基本形に接尾辞 -uo(j)- (< *ōj-), -av- を付加する。このタイプの動詞もまた, かなりリトアニア語において生産的である。o-語幹名詞から派生するが, 他の語幹からの派生語も多い。例 : o-語幹 : gāras 《蒸気》 → garuōti 《蒸発する》 ; báltas 《白い》 → baluōti 《白くなる ; 白く見える》 ; a-語幹 : dainā 《歌》 → dainuōti 《歌う》。

その他の例：juoduoti, pánčiuoti, pīlkuoti, raūdonuoti, sapnúoti, viñguriuoti, plūduriuoti, snūduriuoti, garúoti, kraujúoti, kalkiúoti, etc.

§ 5.11. I-1-C-c : (-oti : -oja : -ojo) : galvóti 《考える》, galvója, galvójo.

このタイプの動詞もまた接尾辞タイプであり、3基本形の全てに接尾辞 -oj- (< *-āj-) を付加する。このタイプの動詞は、本来的に ā- 語幹名詞から派生された名詞由来語であり、生産的である。例：ā- 語幹名詞：pāsaka 《おとぎ話》 → pāsakoti 《物語る》, dovanà 《贈り物》 → dovanóti 《贈る》, galvà 《頭》 → galvóti 《考える》, rasà 《露》 → rasóti 《露で覆われる》, žiemà 《冬》 → žiemóti 《越冬する》, etc. その他からの派生：lāpas 《葉》 → lapóti 《葉で覆われる》, pinti 《編む》 → páinioti 《纏れさせる》, ritėti 《転がる》 → ráičioti 《転がす》, kařtas 《回、度》 → kartóti 《繰り返す》。

その他の例：āšaroti, dovanóti, balnóti, káinoti, núomoti, pánčioti, sáugoti, vāsaroti, abejóti, aukóti, balnóti, gáinioti, etc.

§ 5.12. I-1-C-d : (-ėti : -ėja : -ėjo) : áuklėti 《教育する》, áuklėja, áuklėjo.

このタイプの動詞もまた接尾辞タイプであり、3基本形の全てに接尾辞 -ėj- を付加する。このタイプの動詞は、ē- 語幹名詞から派生された名詞由来語であり、生産的である。例：ē- 語幹名詞：malónė 《恩恵；好意》 → malonėti 《可愛がる》, séilė 《唾》 → seilėti 《唾で濡らす》；他からの派生：akmuó 《石》 → akmenėti 《石化する》；sėnas 《古い》 → senėti 《老いる》, etc.

この活用タイプには、さらに様々なアスペクト的な接尾辞を有する動詞が属している：1) 反復相 (iterative) をあらわす接尾辞 -inėj-, -dinėj- : pirkinėti 《買い込む》, 2) 瞬間相をあらわす接尾辞 -telėj- : bārkštelėti 《どすんと叩く》。また指小的ニュアンスをあらわす接尾辞 -terėj- : bārkšterėti 《軽く叩く》がある。

なおこの動詞の3基本形と同じタイプには、接尾辞動詞ではない一次動詞も含むことができる。例えば, sėti 《種を蒔く》, sėja, sėjo. その他の例：mažėti, šokinėti, ūžėti, akėti, velėti, seilėti, etc.

§ 5.13. I-1-C-e : (-yti : -ija : -ijo) : rūdýti 《錆びる》, rūdija, rūdijo.

このタイプの動詞もまた接尾辞タイプであり、3基本形の全てに接尾辞 -ij- を付加する。このタイプの動詞は、i- 語幹名詞から派生された名詞由来語であり、それほど生産的ではない。例：i- 語幹名詞：akìs 《目》 → akýti 《気孔性になる》, dalis 《部分》 → dalyti 《区分する》；他語幹からの派生：vianas 《1》 → viėnyti 《統一する》。

その他の例：ginčyti, keřšyti, kriķštyti, liūdyti, viľnyti, dantýti, kirmýti, šaknyti, etc.

§ 5.14. I-1-C-f: (-inti: -ina: -ino): sodinti 《植える》, sodina, sodino.

このタイプの動詞もまた接尾辞タイプであり、3基本形の全てに接尾辞 -in- を付加する。このタイプの動詞は、名詞由来語と動詞由来語があり、他動詞を特徴とする。このタイプの動詞は、非常に生産的である。例: garbē 《尊敬》 → gārbinti 《敬う》, báltas 《白い》 → báltinti 《白くする》, áukštas 《高い》 → áukštinti 《高める》, dýgti 《発芽する》 → daiginti 《発芽させる》, etc.

§ 5.15. I-1-C-g: (-énti: -ēna: -ēno): gyvénti 《住む》, gyvėna, gyvėno.

このタイプの動詞もまた接尾辞タイプであり、3基本形の全てに接尾辞 -en- (不定形では acute, 他の時制形では circumflex) を付加する。このタイプの起源は、n- 語幹名詞とみなされる。例: rusėnti 《灯る》, kūrėnti 《焚く》, purėnti 《脆くする》, gabėnti 《輸送する》, ridėnti 《転がす》, etc.

§ 5.16. I-2-A-a: (語根母音 e, a): nėsti 《運ぶ》, nėša, nėšė.

このタイプの動詞は一次動詞であり、語根に短母音 e, a をもち、3基本形において全て同じ語根を有する。例外として、u と é をもつ語根が1例ずつある: gułti 《横たわる》, gūla, gūlė; ésti 《(動物が)食べる》, éda, édė. 語根母音 e, a を有するこのタイプの動詞は、他動詞であり、語根の構造は、CVC を成す。すなわち、このタイプの動詞は、語根において正常階梯を、意味に関して他動詞性を特徴とする。例では、子音の前で交替をおこす場合は、語根の基底形を示す。

例: bėd-, vėd-, sėg-, kėp-, sėk-, tėp-, lėš-, nėš-, pėš-, mėt-, rėzg-, vėž-; lāk-, plāk-, rāk-, kāl-, māl-, sāl-, bār-, kàs-; guł-; ėd-.

語根に短母音 a を有し、活用タイプが -ia, -ė (I-3 型) である動詞も若干ある: ėrti 《耕作する》, ėria, ėrė; tafti 《発音する》, tāria, tārė; žągti 《汚す》, žągia, žągė.

§ 5.17. I-2-A-b: (過去形で語根母音の延長): ginti 《守る》, gina, gynė.

このタイプの動詞は、過去形において語根末の n (まれに l) の前で、i を延長化する。他の形では、短母音 i があらわれる。このタイプに属する動詞は、以下の動詞だけであり、他動詞である。

例: gin- 《守る》, skin- 《引き抜く》, min- 《踏み付ける》, pin- 《編む》, trin- 《擦る》, tin- 《研ぐ》, pil 《注ぐ》.

過去形で語根母音が延長化する場合は、I-3-A-d (-ia: -ė) タイプの動詞に特徴的であり、ginti タイプは例外を成している。このタイプは、子音 n の前でのみあらわれることから、二次的に現れたとみなされる。Kazlauskas (353) によれば、ginti タイプの過去の長母音は、

gĩrti (gĩria, gýrė) タイプからの類推から現れたという: gĩrti: gýrė = gĩnti: x. x = gýnė.

§ 5.18. I-2-A-c: (現在形で e: 過去形で i) : giĩti 《追う》, gėna, ginė.

このタイプの動詞は、現在形で語根母音 e を、その他の形で i をもつ。3 基本形におけるこのような母音の交替は、kiĩti タイプ (I-1-A-d: -a: -o) だけである。このタイプの動詞は、現在形で正常階梯を、その他の形で弱階梯の母音をとる。上の例以外にこのタイプに属するのは、以下の動詞だけである: giĩnti 《生まれる》¹²⁾ (これはまた formant -st- のタイプにも属する), gėma, gĩmė; miĩnti 《覚えている》, mėna, minė; virĩti 《沸騰する》, vėrda, virė.

§ 5.19. I-2-A-d: (-i) áuti: -(i) áuna: -(i) óvė) : piáuti 《切る》, piáuna, pióvė.

このタイプの動詞は、現在時制形に接尾辞 -n- を有する。すなわち、no- 語幹をなしている。このタイプの動詞は、infix -n- を有する動詞 (I-1-A-a) と関連している。そのタイプと異なるのは、このタイプは過去形が -ė で終わっていること、および他動詞であることである。語根は、現在形と過去形において、Cau-: Cou- (C=任意の子音) の交替を示している。これは、印欧語 (IE) の交替 *ou: *ōu から由来したのではなく、後の二次的な *ou: *āu から由来したと考えられる。すなわち、IE *o がバルト祖語で *a に変化したとき、本来の IE *e: *o: *ē: *ō の交替は、バルト祖語で *e: *a: *ē: *ō になった。この際、短母音 *e: *a の影響により、*ō > *ā になる交替も生じた¹³⁾。すなわち、リトアニア語では本来的な印欧語の交替を受け継ぐ e: a: ě: uo と共に、バルト祖語における二次的な交替の反映 e: a: ě: o を持つことになった。ここでの pióvė はそれを反映している。このタイプの例は少ない:

例: liáuti, bliáuti, piáuti, griáuti, džiauti, jáuti, káuti, pláuti, máuti, ráuti, kráuti, šáuti.

§ 5.20. I-2-A-e: niáuti 《盗む》, niáuja, nióvė.

このタイプは、この動詞だけである。すなわち、接尾辞の -n- を持たず、また上で述べた交替 *o: *ā を反映している。

§ 5.21. I-2-A-f: (不規則タイプ):

ここには以下の動詞が属する: aũti 《靴を履かせる》, aũna, ávė; dúoti 《与える》, dúoda, dávė; iĩnti 《取る》, ĩma, ěmė; miĩnti 《死ぬ》, miĩšta, miĩrė; pũlti 《落ちる》, pũola, pũolė; šlũoti 《掃く》, šlũoja, šlãvė.

dúoti は本来 athematic 動詞であるが、thematic 動詞に移行した後に、接尾辞 -d- を現在形で獲得した: dúodame (1 st. pl. pres.) < dúome < *dúodme. miĩšta の š は、formant -st- が *r の後ろの位置で変化したものか¹⁴⁾、あるいは IE *sk からの起源と考える傾向にある: 1 st. sg. pres. *miršu < *mrškō.¹⁵⁾

§ 5.22. I-3-A-a: (長母音語根): glébtī 《包む》, glébia, glébè.

このタイプの動詞は、語根に長母音 é, y, o, ū (ū の場合は、全て circumflex) を含み、3 基本形の全てにおいて語根母音を交替しない。語根は、閉鎖音 p, b, t, d, k, g および摩擦音 š, ž, s, z で終わる。現在形が -ia (<*i-ō), 過去形が -è (<*-ē) で終わるこのタイプの動詞は、多く他動詞性を特徴とし、生産的である。

例: gléb-, gréb-, rĕk-, slĕp-, rĕp-, plĕš-, knĕkšt-, kvĕkšt-, mĕž-, rĕž-, brĕž-; gnýb-, žnýb-, klýk-, mýk-, knýk-, kvýk-, cýp-, čýp-, knýp-, pýp-, trýp-, šnýpš-, krýkšt-, čýž-, dýž-; dób-, gób-, skōb-, glōb-, grób-, smōg-, vók-, dvók-, kóp-, tvōsk-, skród-, kvōt-, blōšk-, švōkšt-, ōš-, kōš-, lōš-, šnōpšt-, rōpšt-, griōzd-, gōž-, gōž-, drōž-, vōž-; žiōb-, kliōk-, niōk-, kriōk-, pliōp-; ūb-, ūk-, niūk-, kriūk-, klūk-, plūk-, mūk-, triūs-, pūkšt-, ūzg-, dūzg-, brūzg-, zūz-, ūž-, gūž-.

語根が長母音であっても、このタイプに属さず、I型に属す例がある: bégti 《走る》, -a, -o; sésti 《座る》, séda, sédo; šókti 《躍動する》, -a, -o; grústi 《細かく砕く》, grúda, grúdo.

§ 5.23. I-3-A-b: (語根に二重母音): baigtī 《終える》, baīgia, baīgè.

このタイプの動詞は、語根に二重母音 ai, au, ei, ie, uo, ui を有し、3 基本形全てにおいて同じ語根をもつ。語根に ui をもつ動詞は、kuīsti 《疾走する》(kuīčia, kuītè) の一語だけしかない。また、ai を有する動詞も若干しかない。その他の母音の内、au を有する動詞が最も多く、次に ie, ei, uo を有する動詞が続く。語根末子音は、閉鎖音 p, b, t, d, k, g および摩擦音 s, š, z, ž で終わることができる。このタイプの動詞は、語根母音の強階梯を特徴とし、5.3 で述べたように他動詞性を一般に示している。すなわち、infix -n- と語根母音の弱階梯、そして語幹が -a, -o で終わることの 3 要素が動詞の自動詞性を示しているのに対し、語根母音の強階梯と語幹が -ia, -è で終わることが一般に動詞の他動詞性を示している。例えば、kīsti 《変わる》, kiīnta, kīto: keīsti 《変える》, keīčia, keītè. このタイプの動詞は非常に生産的である。例として、一部の動詞を示す。

例: [ai]: baig-, kaīt-, žaid-, káiš-; [au]: daūb-, gaūb-, žliaūb-, sliaūg-, žliaūg-, smāug-, ráug-, stāug-, bliauk-, etc. [ei]: kneīb-, smeīg-, neīg-, teīg-, steīg-, kéik-, peik-, reik-, kleip-, geīd-, etc. [ie]: griē-, žiēb-, díeg-, kliēg-, spiēg-, sprieg-, srieg-, pliek-, pliek-, etc. [uo]: žluōb-, ruōb/p-, sliuōg-, driuōk-, kluōk-, suōk-, tuōk-, etc. [ui]: kuīt-.

§ 5.24. I-3-A-c: (語根が二重母音的結合): reñgtī 《準備する》, reñgia, reñgè.

このタイプの動詞は、生産的であり、語根に二重母音的結合、すなわち母音+ソナントを有する。このうち最も優勢なのは、eR (R = r, l, m, n) であり、ar, ir, ur, un, um, ul がこ

れに続き、他の場合はほんの数例である。正常階梯の場合、語根の構造は CVRT (T=閉鎖音) である。ここで興味深いことは語根母音が正常階梯である多くの動詞の場合、意味的に他動詞であるのに対し、弱階梯および ar を有する多くの動詞は、擬音語であるということである。例えば、1) 正常階梯: sklem̄bti 《平らにする》, tem̄pti 《引っ張る》, éngti 《迫害する》, de-
ngti 《覆う》, lenkti 《曲げる》, kęsti (< kent-ti) 《耐える》, skėlbti 《公表する》, steľbti 《驛に
する》, telkti 《集める》, tėrpti 《挿入する》, etc. 2) 弱階梯あるいは ar: biũbti 《ふうんと
音をたてる》, bir̄bti 《同上》, pīrpti 《同上》, svīrpti 《こおろぎが鳴く》, knīrkti 《すすり泣く》,
cīrpti 《同上》, būr̄bti 《ふうんと音をたてる》, gūr̄gti 《(水が) ざぼざぼ音をたてる》, mūr̄kti 《(猫
が) 喉をならす》, zūr̄gti 《(蠅が) うるさい音をたてる》, žliūmbti 《すすり泣く》, gār̄gti 《しゃが
れ声で歌う》, kār̄kti 《(鶏が) 鳴く》, knār̄kti 《駢をかく》, pār̄pti 《同左》, etc. すなわち、こ
こで語根母音に弱階梯を有する動詞は、「自動詞性 = 弱階梯」対「他動詞性 = 正常階梯」と
いう対立とは異なる意味的カテゴリーをつくっている。それ故、それらの弱階梯を有する動詞
が、ia-, è- 語幹をとることはなんら動詞体系を崩すことにはならない。例として一部の動詞を
示す。

例: [el]: deľb-, skėlb-, steľb-, gveľb-, speľg-, smėlk-, telk-, etc. ; [er]: geřb-, bleřb-,
keřg-, vérg-, térp-, etc. ; [en]: éng-, deŋg-, reŋg-, dréng-, véng-, kėnk-, etc. ; [em]:
žlem̄b-, drem̄b-, sveřmb-, treřmp-, etc. ; [ar]: kvařk-, tař-, ár-, etc. ; [ir]: ziřb-, kiřk-,
kniřk-, čiřp-, etc. ; [ur]: uřb-, siuřb-, žliuřg-, zuřg-, etc. ; [um]: žliūmb-, klũmp-,
plūmp-, etc. ; [un]: jũng-, skũnd-, etc.

§ 5.25. I-3-A-d: (母音交替):

1) kélti 《高める》, kėlia, kėlė; 2) plėsti 《広げる》, plėčia, plėtė.

このタイプの動詞は、語根において母音が交替するタイプであり、語根の種類によりさらに二種類に下位区分できる¹⁶⁾。1) 現在形の語根が母音 (a, e, i, u) + ソナント (l, r, m) を有する場合、過去時制のみがそれぞれ延長母音 o, è, y, ū をもつタイプと、2) 現在形の語根が母音 (e, a, u) + 非ソナント (b, k, g, t, s, š, šk) を有する場合、過去時制と不定形がそれぞれ延長母音 è, o, ū をもつタイプである。例: 1) [a: o 交替]: kárti 《懸ける》, kária, kórė; [e: è 交替]: skėlti 《割る》, skėlia, skėlė; [i: y 交替]: skirti 《分ける》, skiria, skýrė; [u: ū 交替]: kũrti 《(火を) おこす》, kũria, kũrė; 2) plėsti 《広げる》, plėčia, plėtė; [a: o 交替]: vōgti 《盗む》, vāgia, vōgė; [u: ū 交替]: pũsti 《吹く》, pũcia, pũtė. 不定形におけるこの違いは、1) の場合には不定形において同音節内に二重母音の結合 (kėl-ti) があり、ここで長母音が短縮されたからおきたものである¹⁷⁾。また a: o の交替は、印欧語本来の交替ではなく、上で述べたようなバルト語に生じた二次的な交替 *o: *ā を反映している。なお、1) と 2) は、過去形でそれぞれ acute と circumflex 音調の違いを示している。例外は ginti 《守る

), gina, gýné (I-2-A-b) タイプの動詞であり, それは 5.17. で考察された。

このタイプの動詞は, 多く他動詞であることを特徴としている。特に, 語根が正常階梯 e を有する場合にはこの傾向が強い。例えば, nérti 《編む》, šérti 《養う》, reṁti 《支える》, lémti 《決める》, beṁti 《薛く》, stvéti 《つかむ》, slégti 《押し付ける》, skēsti 《押し分ける; 広げる》, klēsti 《包む》, drékti 《閉める》, etc. さらにまた, § 5.3. で言及したように, 弱階梯の語根に infix -n- または formant -st- の付加によって形成された自動詞と, 他方, このタイプのような正常階梯の語根を有する他動詞の対立を参照されたい: skilti 《分裂する》, skýla (< *skiñla), skilo: skélti 《割る; 分裂させる》, skēlia, skélé; kilti 《上がる; 生じる》, kýla (< *kiñla), kilo: kélti 《上げる; 起こす》, kēlia, kélé. 例は, 不定形語幹のみをあげ, 語幹末子音の交代がある場合は基底形を示した。

例: 1) kél-, skél-, vél-, žel-, léṁ-, reṁ-, treṁ-, séṁ-, véṁ-, beṁ-, géṁ-, néṁ-, peṁ-, šér-, vér-, sveṁ-, tvér-, stvér-, žeṁ-; kár-; gíl-, vil-, dír-, gír-, skir-, spír-, tír-; dùṁ-, grùṁ-, bùṁ-, dùṁ-, kùṁ-.

2) dréb-, sréb-, slég-, žlég-, lék-, šlěk-, trék-, kēt-, skēt-, klēt-, plēt-, grēs-, krēt-, trēs-, dvēs-, drék-, drěsk-, těš-, rěšk-, trěšk-, těšk-; vög-; pūt-.

§ 5.26. I-4-B/A: (-ia: -o): kentéti 《苦しむ》, keñčia, kentéjo.

このタイプには, 1) 混合動詞と, 2) 一次動詞がある。1) においては, 現在形語幹は -ia で終わり, 過去形語幹および不定形語幹は接尾辞 -ěj- をもち, 過去形語幹は -o で終わる。2) においては, 3 基本形のどこにも接尾辞を持たず, 現在および過去形語幹はそれぞれ -ia と -o で終わる。例: 1) kvepěti 《匂いがする》, kvěpia, kvepějo; reikěti 《必要とする》, reikia, reikějo; 2) léisti 《許す》, léidžia, léido. このタイプの動詞は, これらの動詞しかない。

§ 5.27. II-B: (-ěti: -i; éjo): turěti 《持つ》 tūri, turéjo.

このタイプの動詞は, 混合動詞であり, 現在形語幹は -i で終わり, 過去形および不定形は接尾辞 -ěj- を有する生産的な動詞である。この動詞の活用パラダイムに特徴的なことは, 現在時制における単数 2 人称と 3 人称形の一致である。また語根が弱階梯をもつ場合には, アクセントは常に接尾辞に置かれ (例: miněti 《言及する》), 強階梯をもつ場合にアクセントが必ずしも接尾辞に置かれぬ場合がある (例: skénděti 《沈む》)。このタイプの動詞には, 古い形とみなされるものや (例えば, sěděti 《座っている》, cf. OS. sēdēti, Gr. *εἶσθαι*, Lat. *sedeo*; stověti 《立っている》, cf. Skt. *tastháu*), 名詞から派生した動詞もある。例えば, 擬音語から接尾辞 -s- を伴って作られる派生動詞: kárkt 《カアカア》 → karksěti 《カアカア鳴く》; čirpt 《ピーチク》 → čirpsěti 《ピーチク鳴く》, pókšt 《コンコン》 → pokšěti 《ノックする》, etc.

下に一部の例を示す。ここでは, アクセントが接尾辞にある場合は, 語根にアクセント記号

を付けないで示す。

例：lyd-, žyd-, dind-, lind-, spind-, bud-, liūd-, glūd-, ting-, rūg-, tik-, link-, myl-, tyl-, gul-, min-, nyr-, tur-, bubs-; steb-, gob- žėmb-, ged-, sėd-, skėnd-, skard-, mėrd-, svėrd-, čiáud-, reg-, seg-, gen-, gar-, kar-, per-, gor-, nor-, babs-, tes-, áiks-, etc.

§ 5.28. III-1-B : (-yti : -o : è) : sakýti 《言う》, sāko, sākė.

このタイプの動詞は、現在形と過去形は接尾辞をもたず、それぞれ -o, -ė で終わり、不定形のみが接尾辞 -y- (< *i-) をもつ混合動詞である。このタイプの動詞の中で、語根母音に a, ai, o を有し、語根の構造が (C)CVC の動詞は、より基本的な他動詞である。例えば, manýti 《思う》, rašýti 《書く》, matýti 《見る》, darýti 《する, 行う》, statýti 《立てる》, kratýti 《(手などを)振る》, varýti 《追う》, laikýti 《保つ》, valýti 《綺麗にする; 掃除する》, mokyti 《教える》, ródyti 《示す》, lópyti 《繕う》, etc. さらに、接尾辞 -d- によって語根が拡張された動詞がある : gáudyti 《捕える》 (cf. gáuti 《受け取る》), gimdýti 《生む》 (cf. giánti 《生まれる》), migdýti 《眠らせる》 (cf. migti 《眠り込む》), etc. この接尾辞 -d- は, infix -n- の働きと対称をなしている。migdýti の現在形 mig-d-o 《(彼は)眠らせる》と migti の現在形 mi-ñ-g-a 《(彼は)眠り込む》を比較されたい。さらに、接尾辞 -st- をもつ動詞がある : barstýti 《撒く》 (cf. beĩti 《降る》)。

このタイプの動詞は、かなり多い。例として一部を示す。

例：skab-, gnáib-, knaib-, žnáib-, graib-, ad-, lýd-, jukd-, sand-, sag-, dáig-, láig-, máig-, raik-, vaik-, lank-, mánk-, mink-, mirk-, gan-, tap-, kas-, taš-, drabst-, góbst-, gaubst-, dangst-, etc.

§ 5.29. III-2-B : (-oti : -o : -ojo) : žinóti 《知っている》, žino, žinójo.

このタイプの動詞は、現在形が -o で終わり、過去形と不定形は接尾辞を有し、過去形は -ojo で終わる。このタイプの動詞は、接尾辞による生産的な動詞を除くと、数が少ない。この動詞タイプを成しているのは、意味的に状態をあらわす動詞である。例えば, kabóti 《垂れ下がる》, kýboti 《垂れ下がる》, drýboti 《寝転んでいる》, kniúboti 《俯せに寝ている》, glúdoti 《身を隠している》, sprúdoti 《(隅に)身を隠している》, sāugoti 《維持する, 保持する》, bijóti 《恐れる》, ieškóti 《探し求める》, tvýloti 《黙っている》, rýmoti 《凭れる》, klúpoti 《膝をついている》, karóti 《垂れ下がっている》, tvýroti 《(匂い等がある)》, niúroti 《腹を立てている》, etc. また、接尾辞 -s- によって拡大された動詞を参照されたい : kniúbsóti 《俯せに寝ている》, drybsóti 《寝転んでいる》, murksóti, 《(猫が)うとうとしている》 (cf. murkti 《(猫が)喉をならす》)。

それ以外の例 : taukšn-, stýr-, dėbs-, drybs-, žybs-, dūbs-, bimbs-, kniúbs-, žlags-, smygs-, dryks-, kups-, barkš-, kimš-, gumš-, etc.

§6. 結語

上述した動詞のうちで、接尾辞動詞は二次的起源の動詞であった。これはより生産的であり、現代においてもその造語力を失っていない。問題は、一次動詞である。一次動詞の語根の構造と動詞の自動詞性と他動詞性の関係は、下の表のような傾向にまとめることができる。

種類	自/他	語根母音	階梯	構造	語幹末	例	
I-1-a	自	ì, ù (まれ è, à)	弱	CVT	a, o	stìgti, stiŋga, stigo	+
I-1-a'	自	iR, ùR (àR, eR)	弱	CVR/S	a, o	gùrti, gùra, gùro	+
I-1-b	自	iR, uR, ui, y, ù	弱	CVRC/CVC	a, o	viřsti, viřsta, viřto	++
	自	aR, eR/au, ei, ai, ie, uo	強	CVRC/CVC	a, o	al̄pti, al̄psta, al̄po	
I-1-d	自	o, è	延長	CVC	a, o	šēlti, šēlsta, šēlo	-
	他	iR : eR : iR	交替	CVRC	a, o	kiřpti, keřpa, kiřpo	-
I-2-a	他	è, (a, ul, è)	正常	CVC	a, è	nèšti, nēša, nēšè	--
I-2-b	他	in : yn	延長	CVR	a, è	ginti, gina, gynè	-
I-2-c	他/自	iR : eR	交替	CVR	a, è	giñti, gēna, ginè	--
I-2-d	他	au : ou	交替	CVR	a, è	piāuti, piāuna, pióvè	-
I-3-a	他	è, y, o, ù	延長	CVC	ia, è	glēbti, glēbia, glēbè	+
I-3-b	他	ai, au, ei, ie, uo, ui	強	CVC	ia, è	baīgti, baīgia, baīgè	++
I-3-c	他	eR	正常	CVRT	ia, è	reŋgti, reŋgia, reŋgè	+
	自(裂音語)	ar, ir, un, um	強/弱	CVRT	ia, è	diñbti, diñbia, diñbè	--
I-3-d	他	e, (a, u) + R	交替	CVR	ia, è	kélti, kēlia, kélé	+
	他	e, (a, u) + C	交替	CVC	ia, è	plēsti, plēčia, plētè	+

(生産的な動詞+, 非常に生産的な動詞++, 非生産的な動詞-, 非常に非生産的な動詞--)

すなわち、現代リトアニア語において、一次動詞の構造と自動詞性・他動詞性との関係において、以下のような傾向がみられる。自動詞性を特徴とする動詞は、次の項目のうちの一つを有している：1) 交替を引き起こさない語根母音の弱階梯を有すること、2) 現在時制において、infix -n-, あるいは formant -st- を含むこと、3) 現在語幹は -a, 過去語幹は -o で終わること。例外を成しているのは、I-2-c の場合であるが、これはリトアニア語のなかで極めて数が少ない動詞である。また、他動詞性を特徴とする動詞は、次ぎの項目のうちの一つを有している：1) 現在語幹は -ia, 過去語幹は -è で終わること、2) 語根母音が正常(または強)階梯を有すること、3) 語根母音の交替を有していること。またこれらの項目が多く含まれるほど、その動詞は生産的である。

このような特徴による自動詞性と他動詞性の対立は、リトアニア語の歴史においてそう古いものではないと思われる。それは、*milžti*《搾入する》、*mélža*, *milžo*が、他動詞性のために *mélžti*, *mélžia*, *mélžė* タイプに移行していることから窺える。さらに Kazlauskas (363) によれば、低地リトアニア方言では、動詞 *svilti*《焦げる；焦がす》*svėla*, *svilo* は、他動詞性と自動詞性の両方の意味を持っているという。自動詞としてこの動詞は、共通リトアニア語において *svyla* (< **sviŋla*), *svilo* タイプになっている。このような語根母音の交替を有する動詞は、非常に古い性質をもつと仮定されるが、このような動詞は、本来、他動詞性と自動詞性の両方の意味をもち、ある時その対立が激しくなり、活用タイプの変化を引き起こしたのかもしれない。すなわち、本来的に語根母音の弱階梯によって自動詞性を特徴としていた動詞に引き付けられて、**svėla* は **svila* へと移行し、さらに自動詞性を強調するために infix -n- が挿入された。それに対して、本来的に正常階梯によって他動詞性を特徴としていた動詞、例えば、*nėšti*《運ぶ》のようなタイプに引き付けられて、あるいはまた他動詞性を特徴としていた ai-, é- 語幹に引き付けられて、*mélža*, *milžo* は *mélžia*, *mélžė* へと移行した。現代リトアニア語における自動詞性と他動詞性の対立は、歴史の流れの中でますます激しくなっていると考えられる。

註

- 1) ここでの単純動詞とは、語根が一音節からなる語幹を有する動詞である。
- 2) リトアニア語の用語 "būstasis kartinis laikas" は文字通りは「過去一回的時制」と訳すことができるが、文法範疇としては単純過去を示すので、ここでは「単純過去形」とした(矢野教授, 1982を参照)。以下で単に「過去形」と言う場合は、この単純過去形に相当する。
- 3) ここでの語尾とは、便宜的なものである。リトアニア語の動詞の3人称の語幹末音 -a, -o, -ė は、共時的には語尾とみなされるが、本稿ではこれを語尾とみなさず、語幹末音として扱うことにする。さらに1章を参照。
- 4) Zinkevičius (1981: § 553-562) 参照。
- 5) 軟子音の後ろの位置では e と a の音は区別されないために、他のパラダイムと同じ a を標記する。
- 6) 基底形とは、ある形が異なる環境の下で二様に現れる場合、ある形を基にすることにより、記述をより単純化できる形である。
- 7) 本稿のリトアニア語の動詞の例は、Robinson (1976) の逆引き事典に掲載されている単純動詞を、主として共通リトアニア語の辞典である Lyberis (1971) と Dabartinės lietuvių kalbos žodynas (1972), および Kurschat (1968-1973) によってその活用型を調べたものである。若干の動詞にたいしては、Senn-Salys (1932-1968) も参考にした。
- 8) infix -n- の非閉鎖音での使用は、バルト語にのみ特徴的な現象である。他の印欧語においては、infix -n- は閉鎖音の前にのみ現れる: Olnd. *yūñmah*《1. Pl. 繋ぐ》< **ju-n-g-mé / ós*, Lat. *jungimus*, Lith. *jūngiame*。すなわち、リトアニア語における infix -n- は、非常に生産的であることを示している。また古代インド語の infix -n- については、柳沢 (1989) を参照。
- 9) Senn-Salys (1932), Kurschat (1968) によれば、*gimti* は "*giñti : gemù und gimstu, gimiaũ ...*" と記述されている。本来的には、formant -st- のない語根母音の交替タイプ(本稿での記述方法では、I -2 -A-c。例: *giñti, gēna, ginè*)であったであろう。今日の形において、語幹の均一化と

formant -st- の拡大傾向を見ることができる。

- 10) Kazlauskas (319-320) 参照。
- 11) ここでは, athematic 動詞は扱わないので, これらの歴史については Kazlauskas (304-316), および Zinkevičius (1981: § 553-562) を参照されたい。yra の起源については, 名詞起源, その他が考えられている (Zinkevičius (1981: § 531) を参照)。
- 12) gir̃ti については, 註13) を参照。
- 13) Zinkevičius (1980: § 128) 参照。
- 14) Zinkevičius (1981: § 537) 参照。
- 15) Kazlauskas (330) 参照。
- 16) Kazlauskas (337) 参照。
- 17) Zinkevičius (1980: § 125) 参照。

資料・参考文献

- Dabartinės lietuvių kalbos žodynas*, Lietuvos TSR Mokslų Akademija, Lietuvių kalbos ir literatūros institutas, Vilnius. 1972.
- Grammatika litovskogo jazyka*, Lietuvos TSR Mokslų Akademija, Lietuvių kalbos ir literatūros institutas, Vilnius. 1985.
- Endzelins, J. 1971. *Comparative Phonology and Morphology of the Baltic Languages*, Mouton. (translated by Schmalstieg, W. R. and Jegers Benjaminš)
- Kazlauskas, J. 1968. *Lietuvių kalbos istorinė gramatika*, Vilnius.
- Kurschat, A. 1968-1973. *Litauish-Deutsches Wörterbuch*, I - IV, Göttingen.
- Lyberis, A. 1971. *Lietuvių-rusų kalbų žodynas*, Vilnius.
- Robinson, D. H. 1976. *Lithuanian Reverse Dictionary*, Slavica.
- Senn, A. 1966. *Handbuch der litauischen Sprache* I, Heidelberg.
- Senn, A. -Salys, A. 1932-1968. *Wörterbuch der litauischen Schriftsprache*, I - V. Heidelberg.
- Zinkevičius, Z. 1980. *Lietuvių kalbos istorinė gramatika* I, Vilnius.
- 1989. *Lietuvių kalbos istorinė gramatika* II, Vilnius.
- 矢野通生, 1982. 「リトアニア語の動詞のアクセント記述」, 名古屋大学文学部論集 LXXXII.
- 柳沢民雄, 1989. 「古代インド語の動詞のアクセント(I)」, 名古屋大学言語学論集第5巻.